

〈成熟〉という困難なミッション

佐藤史生『死せる王女のための孔雀舞』における「成熟と喪失」について

● 神田 浩一

1. 「死せる王女」あるいは「イマジナリィ・ワールド」の異端児

「ポスト24年組」の漫画家である佐藤史生（1950-2010）¹の『死せる王女のための孔雀舞』（1983）²は女子高生七生子を主人公とした連作短編集の総題³である。新書館から出された漫画雑誌『グレープフルーツ』（1981-1988）に4回にわたって掲載された⁴。

この短編集は佐藤史生の作品群の中では異色である。敬愛するSF作家として人類補完機構シリーズの独創的な物語世界を構築したコードウェイナー・スミスを挙げ⁵、また「世に快樂はいろいろあるが、一つの世界を丸ごと造る位おもしろい遊びはない。いわゆるイマジナリィ・ワールドというやつですね⁶」と述べる佐藤史生の作品は、代表作『夢見る惑星』や『ワン・ゼロ』は言うまでもなく大部分が男性を主人公にしたSFかファンタジーで、独自の世界を構築することに主眼があるのに対して（だから作者の関心は「個体」よりも「種」の運命あるいは「世界構築」に向けられている）、『死せる王女のための孔雀舞』では思春期の少女を巡る心理劇がまるでラディゲの心理小説さながら展開していき、成熟という少女漫画の古典的テーマが正面切って問題にされているからである。佐藤史生がど

1 ペンネームは「砂糖・塩」という語呂合わせからなる。竹宮恵子と萩尾望都の共同生活の場であると同時に駆け出しの少女漫画家やその卵や漫画愛好家たちのたまり場となっていた「大泉サロン」の中でも佐藤史生は「人間としての潔さと暖かさ（原文ママ）、豊かな知識、頭脳の明晰さ」（増山法恵「ドサド」と大泉サロンの思い出』『死せる王女のための孔雀舞』復刊ドットコム2012年所収）によって抜きん出た存在であった。特に理知的な作風で知られ、寡作ながら根強いファンがいる。

2 佐藤史生『死せる王女のための孔雀舞』1983年、新書館。単行本化されるにあたって代表作『ワン・ゼロ』の前史となる「夢喰い」が追加されている。

3 第二話のタイトルであり単行本のタイトルにもなっている「死せる王女のため孔雀舞」は当然ラヴェルの曲から取られたものであるが、後に七生子の実父であることが判明する公春が描いた燃え上がる深紅の翼をもった孔雀の絵が挿入されたオルゴールに「七生子へ、我が亡き王女へ」と公春が添えたことから分かるように亡き王女とは七生子のこと示している。この総題から4つの物語全体が七生子の物語であることが示されている。

4 「雨男」『グレープフルーツ』第1号、新書館、1981年、「死せる王女のための孔雀舞」『グレープフルーツ』第2号、新書館、1981年、「さらばマドンナの微笑」『グレープフルーツ』第4号、新書館、1982年、「我はその名も知らざりき」『グレープフルーツ』第7号、新書館、1982年。

5 『グレープフルーツ』第22号、新書館、1985年、166-167ページ。

6 『グレープフルーツ』第33号、新書館、1987年、234ページ。

のような意図をもって七生子シリーズを描いたのかは証言が残されていないので確かなことは何も言えないが、できあがった作品を見ると、SFとファンタジーを主戦場にした佐藤史生が、実は正統的な心理ドラマにも卓越していたことを読者に確信させるに足りうるものになっている。

この小論ではこの七生子シリーズに描かれた静謐かつ情熱的な心理劇を、少年少女にとって喫緊の問題であるがゆえに少年少女漫画の古典的テーマとなっている〈成熟〉という観点から読み解いていきたい。

2. 過去の自分との対峙

七生子シリーズの4つの物語のすべてにおいて成熟が主題となっている。ただし主人公七生子の紹介として4つの物語全体の導入となる「雨男」では、成熟の様相は他の3つとは異なっている。

物語は主人公七生子が学校をさぼり、空き家となっている亡き祖母の生家で庭をぼんやり眺めているところから始まる。庭と七生子の姿を背景にしてモノログが3ページにわたり続き、この物語の主題が思春期の女性の心理に関わることを示唆している。

突如、にわか雨が降り、1人の男が空き家だと思い雨宿りに来る。男を静かにさせて庭を写生していると男は絵を見せろと言う。絵を見たあとで、男は七生子に唐突に言う。「まあきみの絵はね、昔っから……迫力があつたよね。いろいろな点でさ。」「七生子……きみ加賀美七生子だろう？」

驚く七生子に男は続ける。自分は目立たなかったから名乗っても覚えているまいと前置きをしつつ、七生子が小学生時代に通った八田画塾で一緒だったと。画塾時代のことは思い出したくないと言う七生子に、あふれんばかりの才能をもてあまし、周りにある絵をかたはしからけなしていくほど生意気な小学生だった七生子に対して、八田画塾の生徒たちは七生子の絵を切り裂いたり汚したりと数々のいやがらせをして、その結果、画塾をやめたからねと男が答えると、七生子は八田画塾をやめた理由はいじめではないと真相を次のように語る。

当時の七生子は学校にも行かず友だちも作らないというように、絵以外のことすべてをないがしろにしていた大問題児であり、心配した父から絵を描くことをやめるように言われた。父に反抗した七生子と父は物置の内と外で三日間の根比べをするが、体の弱い母親が倒れてしまう。倒れた母を前にして謹厳実直を絵に描いたような父が惑乱する姿と、心

配のあまり憔悴しきった母を見て、またその際に示された父の深くて広い愛情に心を打たれた七生子は絵さえ描ければ幸せだと思っていたエゴイステックな自分を恥じて後悔して自分は間違っていたと断じて絵をやめたというのである。

その後、男は七生子に八田画塾にいたときから七生子のことを好きだったと恋を打ち明ける。いじけた弱虫でいろいろなコンプレックスで窒息寸前だった自分と比べると、七生子は天から与えられた才能に誠実無比に奉仕していてその潔さを驚嘆しながら見ていたというのだ。「昔ぼくはきみをみているだけだった。ただもう目をみはって。きみが来なくなって、そのことをどれだけ後悔したか。後悔して、後悔して、そのあげくわかったんだ。あれが恋だったとね。」

呆然とする七生子にキスをして男は去って行く。そして後日、男が莊村類という名前で美術の臨時教師として自分の通う高校に赴任してきたことを知る。そしてそれが画塾の隅で自閉症児のように押し黙っていた憂い顔の美少年ルイだったこと知り現在とのギャップに驚く。

類と七生子の恋愛は4つの物語を支える軸として機能していくのだが、成熟の観点から見ると「雨男」では2人の恋の始まり以上に大事なことがある。それは過去の七生子と現在の七生子の葛藤とその昇華である。

周囲の人間を全く顧慮せずによりあまる才能だけに奉仕して生きていた過去の自分は、現在の七生子から見ると「エキセントリックでくそ生意気なチビ」であり、その生き方は間違っていたと後悔の念とともに断罪され「物置に閉じ込め」られた。そして現在では友人にも先生にも評判が良くて両親にも心配をかけない優等生として居心地良く生きている。それは類が「自分のみじめさや自己嫌悪から目を離すのに二十年かかった、おれは。それをやすやすとまあ……」といみじくも語るようにきわめて性急で急激な成熟である。性急で急激であるがゆえに代償も大きい。七生子は自分のすべてだと思っていた絵を断念することでそれを成し遂げる（第二話で分かるのだが、それは奇しくも父のたどった道と同じである。父は妻との愛に生きるために絵を断念する。この物語群では成熟とはある種の断念であるというメッセージが繰り返される）。そしてあふれでるほどあった絵の才能は絵から離れている間に失われてしまう（「そりゃね、きみの絵は昔原始太陽みたいで、今は青白い月くらいの違いはあるよ。」）。その決断には後悔はないはずである。

しかし、ときどき孤立無援の過去の自分を懐かしむ気持ちがむくむくとわき上がってくる（「でもそれと孤立無援のあのころとどっちが楽しいかっていうと本当のところわから

ないのよ。正直なつかしいって気はする。』)。高校をさぼり煙草を吹かしながら絵を描くのは、過去の自分に対するやみがたい郷愁ゆえになされる行為であろう。

そのタイミングにかつて八田画塾で一緒だった男が現れるというのは、一見すると抑圧していた過去の亡霊が回帰してきたとも解釈できなくもない。しかし七生子に恋を打ち明ける類は決して過去の七生子だけを賛美して崇拝するのではなく、過去の七生子を内包しつつ変容を遂げている現在の七生子をも肯定し受け入れており（「……つまり、さっき、ガラスごしにきみをみたときにだな、ひとめでわかった。七生子だ！ きみが昔とかわらないということではなく、むしろぼくの中でイメージどおりに育った七生子と同じなんだ。わかるか？ 』）、その意味では類の登場は、選ばなかった過去のノスタルジックな反復ではなく、選んだ現在を祝福する過去からの贈り物だと言えるかもしれない。そのために現在の七生子は「七生子、小さな七生子を物置から出してやろうか……」と思えるのだろう。断念を後悔するのではなく断念することによってしか得られないことを祝福すること、過去を抑圧するのではなく現在の自分に統合することがこの「雨男」における成熟の形である。

3. 代用品はそれでも幸せになれるだろうか？

「雨男」では抑圧していた忌まわしくも懐かしい過去の自分との和解という形で成熟はなされるのに対して、残りの3つの物語では成熟は主に父を乗り越えるという形で提示される⁷。

単行本のタイトルになっている第2話の「死せる王女のための孔雀舞」では、七生子の父離れと七生子の妹水絵の父離れの失敗が対比的に描かれる。

七生子は亡き祖母の生家でくつろぎ、祖母の思い出とともに彼女が絶賛した自慢の息子、門馬公春（父彬彦の弟）の写真を眺めている。祖母によると公春は端正な貴公子の顔立ちで少年時代は神童と呼ばれ誰にでも好かれる素直で優しい性質だったらしい。

うたた寝をしていた七生子は物音で目を覚まし、庭で孔雀をかかえた少女と出会う。彼女は亡くなった門馬公春の娘の水絵だと言う。水絵は七生子の自宅へ行き、門馬公春がパ

7 乗り越えるべき人物が〈父〉であるというのは登場人物が女性であるというのが大きいだろう。例えば、「死せる王女のための孔雀舞」の水絵のように、「月の子 ムーンチャイルド」（『プチフラワー』1986年12月号）では自分の存在は、愛する人が真に愛する者の代用品でしかないことの苦悩が主要なテーマになっているのだが、登場人物が男性であるために乗り越えるのは〈母〉になっている。

りで画家をしており、芸術的な評価はさておき、その絵は熱心な好事家の間で引く手あまただったこと、長い間精神を病み、薬物を大量摂取して自殺したことを七生子の両親に告げる。水絵の攻撃的な話しぶりから兄弟の確執を察する七生子だが、両親に尋ねてもかなりひどいけんかをしたとだけしか答えてくれない。孔雀の悪夢にうなされて夜中に目を覚ますと納戸の方で両親が言い争いをしていて、父が母を殴ったあとで抱きしめているところを目撃する（その時オルゴールが倒れていて音楽が流れていた）。

次の日に水絵のもとを尋ねると水絵は公春の絵を整理していたところである。その中の深紅の孔雀の絵を見た瞬間に衝撃で七生子は気絶をしてしまう。水絵の話によれば、それは「死せる王女のための孔雀舞」と呼ばれる秘蔵の絵で誰にも見せたことがないものであるが、七生子はその絵を確かに知っている。そして同名のラヴェルの曲を聴いたときにそれが昨晚、両親のところにあったオルゴールの曲と同じであることに気がつく。

帰宅した七生子はオルゴールを見て、そこに描かれているのが先ほど見た公春の秘蔵の絵であり、「七生子へ、我が亡き王女へ」という献辞があることを知る。そして父から七生子は公春と母との子どもであり、公春の子どもがお腹に中にいるのに、父は公春から母を奪い、傷心した公春はパリへ行ったのだと語る。恋愛とはそういうものだという父の身勝手さに七生子は憤りを覚える（「——お父さんらしい話ね。いつも自信があって、まちがわず、後悔せず」）。

怒り心頭の七生子は次の日に類に事情を話し、類の叔父である画商を通じて門馬公春のことを調べて欲しいと頼む。

そこで七生子は意外な事実を知る。まずはフランスのサン・ド・レ・コンクールを最年少で通ってマスコミを騒がせたのが、父であったことである。また水絵が持ってきた公春の絵はすべて抵当に入っているので返却しなければいけないということである。

七生子は急いで水絵のところへ行く。水絵は木の上に座り込んでいた。聞くと孔雀を下ろそうとして登って降りられなくなったらしい。水絵は降りて来いという七生子の言葉に公春とのことを思い出して飛び降りてくる。水絵は錯乱していて1人にしておける状態ではないので七生子は亡き祖母の生家に泊まっていくことにする。

そこで七生子は水絵に公春のことを尋ねる。

「どんな人だった……？」

「魔術師」

「え？」

「だれもかれもパパと親しくなりたがったわ。まるで魔術をみているみたいだった。あの人が人を魅了するのをみているのは。」

公春は誰からも愛される魅力的な人物であったが、「千万の愛をそそがれてもただ一つが得られないために、自分自身もこの世界も無価値だとおもいこんでしまう」ゆえに心の奥底に深い闇を抱えていた。そしてそれは七生子の出生の秘密に関わることであった。父が七生子に告げたことと真実は異なっていた。

水絵によれば、公春が愛していたのは兄の彬彦あるいは彬彦と恋人刀美との「絆」であり、そのために兄の恋人を誘惑したのだが、うまくいかず逆上した公春は実力行使に出る。刀美は妊娠して自殺未遂を起こす。刀美を救うべく子どもの父を名乗った兄彬彦は厳格な母から勘当され、弟公春は渡仏して絵画を始める。というのも若くしてフランスの賞を獲得した兄彬彦にとっては絵画こそ生きる道となるはずのものだったから、弟公春としては兄のたどるべきだった道をたどることでわずかでも愛する者に近づくことができるからだ。しかし、公春が望んだたったひとつのものは、兄彬彦への愛であり、兄彬彦と刀美の「絆」であり、その絆の結晶である七生子である。

「パパの王女さまになるかい？」と公春に言われて養女になった水絵は自分が七生子の影にしか過ぎないことを十分に自覚していた（「病気をしてからときどきあの人はわたしを「七生子」と呼んだわ）。それでも公春に幸せにしてもらったと思っている。

「あの人は愛する方法をしらない不幸な人だったけれど、あの人を愛した人達は不幸じゃなかったわ。ママンやわたしがそうだったように」

そして公春を愛した人は公春が心の奥底に癒やしがたい絶望を抱えているのを何とかしてやりたいと思う。

「あのひとをお兄さまの十分の一でも幸せにしてあげたかったわ。」

だから水絵はあの世にいる公春のところに七生子を送り届けることで七生子の影でしかない自分も公春の「王女」になれると思い、公春の絵と祖母の家に火をつけて無理心中をはかろうとする。七生子は水絵がワインに仕込んだ薬のせいで意識が朦朧とし、実父公春のもとへ水絵とともに行くという誘惑に抗いがたい。

実父公春は深紅の孔雀の姿で七生子に呼びかける。

「七生子」、

「あれは父の声だ。深紅の翼を持つ父。わたしの中を流れる彼の血――。深紅の翼。火の孔雀舞。」

七生子を助けようとして現われた養父彬彦に錯乱した七生子は言う。

「わたし行かなくちゃ。水絵さんがそういったの。ひとりではだめなんだって。わたし、あの人がかわいそうなの……」

しかし養父彬彦の必死の声と息苦しいほどに抱きしめる腕によって七生子はその誘惑を辛くも退ける。

「おまえはわたしの娘だ。わたしと母さんの間のたった1人の大事な娘なんだ。おまえと刀美。それがわたしのもっている全部だ。あとは皆公春のものだった。皆だ！ それをうらんだことはない！ だがもし今おまえがおれの娘でないというなら、おれは一生死んでしまった弟を憎まなくてはならぬのだぞ。」

病院で目を覚ました七生子は母刀美から公春とオルゴールの逸話を聞く。公春は一度だけ帰国して刀美と生まれた子に会いに来るが、刀美は公春を拒絶する。

「七生子は彬彦との娘です。あなたの娘は死にました。わたしが死のうとしたあの時に……」

そしてパリの公春から例のオルゴールが届いたというのである。母は続ける。

「でもあなたは公春さんよりもずっとお父さんに似ているわ。ずっとよ、七生子……」

物語は七生子が深紅の翼をもつ亡くなった妹水絵の絵を描く決意をするところで終わる。

七生子の父離れの過程は錯綜している。それは彼女には2人の父がいるからである。養父⁸の彬彦から見ていこう。親離れが起こるためには、親が親という顔だけでなく、ひとりの人間であるという気づきが大事であるが、七生子はこの物語で、謹厳実直で正論を楯にしてつねに自信满满だと思っていた父の別な側面を知ることになる。まずは史上最年少としてフランスの絵画コンクールで賞を取った（ということは将来を囑望されていた）絵描きであったということはかつて絵がすべてであった七生子にとって大きな驚きであった。さらに父と母の結びつきに大きな恋愛ドラマが存在したことを知り、父をひとりの男として反発、共感できる土台を手に行っている。ただしその父離れは父の存在が強烈であるということのをのぞけば（「あの人は特大のタンコブだな」と七生子も認めている）特別なプロセスを経るような難しいものではない。一方、実父公春との場合、父離れは困難である。そもそも本人はすでに亡くなっていると同時に、娘への愛情が得られないことが父の

8 子どもの認知をしたのは彬彦であるので彬彦は戸籍上の父であり七生子も彬彦を父として認め公春のことは終始おじさまと呼んでいるがここでは便宜上こう呼ぶことにする。

根源的な絶望になっているからだ。そして、この不在の実父は、このエピソードの場合は水絵であるが、公春を愛した者を通して父との合一を呼びかけてくる。ここでは養父彬彦の力でかろうじてその誘惑を退けるが、それを本来的に拒絶するのは最終話を待たなければならぬ。

それに対して水絵が父離れをするのは不可能に近い。公春にとって水絵はあくまでも七生子の代用品でしかなく、水絵は最初から愛されてはいない。愛されていない水絵にとっては父に愛されること、つまり父との合一こそが存在理由となってしまうからだ。その存在理由は決してかなえられることはない。その代わりに水絵が求めることは、愛する父が求める幸せを少しでもかなえてあげることである。そのために父公春が心の底から求めていた七生子を公春のもとへ連れて行こうとする。七生子と一緒にいくことで自分も父の王女になれる、つまり父に愛されるという思い込みは歪んではいるが一途で健気な愛であると言える。飛べない孔雀である⁹水絵は父離れを拒否して火の孔雀である父との合一に命を落とすが、だからと言って彼女が不幸であったとは言い切れないだろう。

4. 憎しみはやはり屈折した愛＝固着ではないだろうか？

第3話の「さらばマドンナの微笑」においても第2話に続き成熟の失敗が描かれる。全体としては亡くなった公春の呪縛が大きなテーマである物語群の中では、公春が登場しないという意味では傍系的と言えるこのエピソードは紙数の関係から手短かに述べたい。

地方の名家である楯縫病院の一人娘まどかは一種侵しがたい威厳をもった美貌を備えていて他の生徒から畏敬の念とともに「マドンナ」と呼ばれている。ふとしたことでマドンナと知り合いになり彼女に絵のモデルを依頼することになる七生子は、彼女が容姿端麗な教育実習生の教師交野真澄と交際していることを知る（そもそもマドンナは七生子が臨時教師の類と付き合っていることに親近感を持ち近づいてきたということがあとで分かる）。さらにこの交野真澄は自分の父が看護婦だった女に産ませた子どもであり、真澄の辛い生活ぶりを数年前から興信所の報告によってすべて知った上で、真澄には自分が異母兄弟であることを知らないと思わせて交際していることをマドンナから打ち明けられる。その後

9 七生子が水絵を訪ねると彼女は羽を痛めた孔雀を助けるために木に登って降りられなくなっている。七生子が降りてくるように言うと、水絵は父公春との思い出が蘇りまるで小さな子どもだった自分が父公春のところへ飛び降りたように七生子のところに飛び降りてくる。飛べない鳥（実際には孔雀はかなり飛べる）として奇形な美しさを手に入れた孔雀の水絵は父の保護下のもとでしか飛べないという自立の不可能性と彼女がすでに精神錯乱していることをこのシーンは示している。

マドンナと教育実習生真澄は駆け落ちをして失踪して、七生子のもとには大量のくちなしの花が届く。

成熟という観点から見ると楯縫まどかの場合は、憎しみによる父への固着による成熟の失敗例と言えるだろう。

マドンナは、「私、楯縫病院のひとり娘で、とても大切に育てられたわ。おさな心にも家や両親がとても自慢だった。とくに父は私にとって唯一最大の愛と尊敬の対象だったわ。その父の自慢の宝物である自分が誇らしかった」という言葉通りに父を盲目的に愛していた。しかし、その愛する父が婚約者がありながらも看護婦に手を出したという事実を知って、愛情が反転して憎悪に変わってしまう。マドンナは七生子に打ち明ける。

「私は父を許さない。私を裏切った父を一生許さないわ！」

これだけならば程度の差はあれ多くの親子に生じうることである。しかしマドンナの場合、そこに異母兄弟との恋愛が絡んでくるので話が複雑になる。

「私は父の知らないところで彼を幸福にするの。父のいないところで自分の幸せをみつけるの。」

マドンナは父が不幸にした真澄を幸せにすること、自分自身を父の価値観から見た場合の不幸へと陥れることで逆説的に幸福になることで、自分を裏切った父に復讐しようとする。それは父への憎しみに固着することで父離れに失敗していると言えるのだが、父への復讐と真澄との恋愛は表裏一体をなし彼女の存在理由となっている。

5. 親和力と巡り巡る救済

最後の「我はその名も知らざりき」では七生子は、公春と縁のある人物との関わりから実父である公春の強い呪縛を再び感じ強く魅惑されるが、最終的には自力で自分に呪いをかけた公春の存在を間接的に祝福することでそこから解放される。

受験を控えた七生子は父の親戚でW大助教授の諸井に受験勉強を手伝ってもらおう。初対面であるにもかかわらず、七生子は諸井に強い既視感を抱く。

「やわらかくかすれたこの声さえも——記憶になるような気がする。痛々しいほどに清潔な長い指でかきあげる。青銅の迷路のようなその髪も。」

しかしその理由は分からない。ある日、酔った諸井に抱きしめられキスされたときになんとも良いから抱かれないと七生子は思う。かろうじて理性の残っていた諸井に帰宅を促されたあとで七生子はその足で類のところを訪れキスを迫る。しかし諸井に感じたよ

うな欲望を類には感じない。類との会話の中で、七生子は諸井が実父である公春に似ていることに気がつく。そして諸井に感じた既視感は実父公春の血の呼び声というようなものであるかもしれないと考えるが（生まれる前からあの人を知っていたような気がした。それは彼が公春おじさまに似ているせいだろうか?）、「それとも——」と別な可能性について思いを巡らす。

受験勉強に必要なノートを諸井の家に忘れてきたことを思い出した七生子は心配する類をよそに再び諸井の家を訪ねる。諸井は教え子のひとり「葉」と情事にふけていた。

七生子は諸井に次のように述べる。

「これは親和作用です。わたしはたぶん……あなたに似ているんです。そしてあなたは彼に似ている。門馬公春に。」

七生子が語る「親和作用」という言葉には、ゲーテの『親和力』も遠い反響としてはあるのだろうが、ここではおそらく感情の化学反応的な結びつきやすさのことを指している。化学反応的な結びつきというニュアンスから、この感情の結びつきは「恋愛」とは異なったレベルの即物的なものだという含みもあるだろう。七生子の言葉に対して諸井は次のように答える。

「彼はぼくを軽蔑していた……。ぼくがあまりに彼と似ていたの。また似ているという理由で愛し求めたの。」

その言葉に対して、両親の愛を受けて真っ直ぐに育った七生子は素直に疑問をぶつける。

「なぜ……自分を愛してくれる人を軽蔑したりするんです？」

諸井の答えは、公春はたったひとつの欲しいものが手に入らないために自分と世界を無価値と思い込んでいたという水絵の言葉にも呼応する。

「あまりにも深く自分自身を憎んでいたからね。」

公春はその端麗な容姿と魅力的な人柄と、同時にどこまで行っても癒やされない深い絶望ゆえに、関わった人たちを死んでもなお呪縛し続ける。呪縛は公春から愛されたい、そして公春を絶望から救いたいというものだ。諸井も公春の絶望に感染してこの呪縛の中でアルコール中毒気味で生きている。しかし公春の遺伝子を受け継ぎながらも彬彦の精神を持つ七生子の存在はその呪縛からの解放をもたらさう。

「わたし諸井先生が好きだわ。公春おじさまだっけと好き。先生と似ているんですよ。」

七生子の言葉は、直接的には目の前にいる諸井に向けられたものであるが、間接的には

諸井に呪いをかけている公春にも向けられている。「自分を憎む必要はない。あなたが望むものを私はあなたにあげる。私はあなたを愛する」と。この〈私〉は七生子であると同時に公春の兄彬彦の精神、公春が生涯待望してやまなかった「あったかい血が流れるピカピカのハート」でもある。つまり、公春はほとんどすべてを手に入れながらも、兄彬彦への愛（彬彦と刀美との絆でありその結晶である七生子）が手に入らないために、ただその1点のためだけに自分と世界のすべてが無価値だと思い絶望していたが、愛されても良いのだ幸せになっても良いのだと七生子を通して兄彬彦の魂に祝福される。

その祝福の言葉を諸井は次のように受け止める。

「きいたか公春、愛に足りぬ魂などない、愛に足りぬ人生などないのだ¹⁰。」

祝福の言葉に続けて七生子は言う。「ノートはお返しにありません。お元気で。」

諸井に強く魅惑されるのはある種の感情の化学反応であり恋愛ではなく（あるいは血の呼び声であるかもしれない）、そこに固着することは、ある意味で父との合一であり、成熟を拒否することである。この父への固着の魅惑は極めて強く水絵やマドンナは抗えなかったし、七生子も第2話の段階では養父の彬彦がいなければ父公春の呼び声には抗えなかったが、七生子はここでは誘惑に対して踏みとどまる。彼女には心配して待ってくれる恋人類がいるからだ。

「類の顔はともされた洋灯のように明るくてこれなしには金輪際暮らしていけないと思わせました。」

「どのみち彼がいなくては泣くことだってこうは容易ではありません。」

養父の彬彦からの父離れについて、七生子に課せられたもうひとつの父離れである公春からの父離れは、父の呪いを祝福の言葉で浄化することで果たされている。

6. 結論 成熟とは何よりもある種の断念である

以上、七生子を巡る4つの物語を見てきたが、成熟という観点から見ると、どのようなことが言えるだろうか？

何よりも特徴的であるのはすべての物語で成熟がある種の断念と切り離しがたいものと

10 この台詞があるコマでは、おそらくは諸井にとっては公春の代用品にすぎなかった高校生「葉」が諸井にすがりつき、公春の呪縛から解放され穏やかな表情の諸井がその「葉」を代用品としてではなくひとりの人間として背中に感じているように見える絵が描かれている。そういった端役のドラマも忘れていないところが佐藤史生の魅力である。

して描かれていることである。

小学生の七生子は天から授かった絵の才能に奉仕するだけの生き方は周りを不幸にすることに気がつき、絵とともに生きることをきっぱりと断念することで成熟をはかる。七生子の日常生活の幸せは彼女の絵の才能と引き換えに得られたものである。そもそも父彬彦自身が妻刀美との愛に生きるために絵を断念することで幸せを獲得している。

次に成熟は父子一体の状態への抗いがたい誘惑に対する断念としてある。この父子一体の状態は深紅の翼をもった孔雀の呼び声として主人公七生子を彼岸へ連れ出そうとするが、その血の呼び声に対して、理性・日常・幸せを象徴する養父彬彦の声により此岸へと引き戻される。この養父彬彦のドラマを知ること、養父彬彦をひとりの人間として見直し父離れを成功させた七生子は最後に実父の亡霊である諸井と対峙して、魅了されそうになるが浄化する。こうして七生子は養父と実父の2人の父を乗り越えて成熟を果たす。

最後に4つの物語では、成熟の失敗例が描かれるが、それは必ずしも否定的に描かれていないことも強調しておきたい。水絵もマドンナも諸井も、そして他ならぬ七生子の実の父である公春も成熟に失敗している。しかしその失敗の様子は、それぞれの存在理由と深く結びついていて説得的な悲劇と呼べるものになっている。そうであるがゆえに成熟の困難さが強調され七生子の成熟の成功が僥倖であることを読者に強く感じさせる。